



連載の解説版「もう一つの『発達の中の煌めき』」第十回は、こちらから見るすることができます。

発達の中の

煌めき

第一部

障害のある子ども・なかまの発達



白石正久 白石恵理子

しらいし まさひさ / 1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし えりこ / 1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

第12回 「社会」のなかで自分をつくる

「自分のことを書いてください」

第十一回につづき、発達における「九歳の節」をテーマとして、「社会」のなかでの自分づくりについて考えます。

まずユキさんのことを書きましょう。

ユキさんの発達は、養護学校（当時）中学部に進むとき「七歳の節」にありました。そのころ放課後支援のボランティアに憧れて、文字に思いを託して手紙を書くようになりました。自分の経験を振り返り、心情をみつめて言葉で表現することは、「書きことば」を豊かにするだけではなく、自分はどうな存在なのかを問いつづけていくための土台となります。

「自己紹介するつもりで、自分のことについて何でも書いてください」と尋ねる発達診断のための質問があります（『新版 教育と保育のための発達診断・下』、一八〇ページ）。自己を客観的にとらえる視点の発達をみる課題ですが、子どもの生きている「社会」のありようを理解する手がかりにもなります。

ユキさんは、高等部一年生で次のように書きました。

「わたしは、わるがきです」。「わたしは、やさしいたくさんのともだちをつく

りたい」。「おにいちゃんとけんかした」。「わるいことしたて（したって）あやまることがない」。

「七歳の節」の頃には、自分をみつめる目は育ち始めたばかりであり、「たいいくがすき」「さんすうがにがて」などと、「すきーきらい」「じょうずーへた」などの具体的なことに依りながら自分のことを書きます。ユキさんの表現は、もうその節を越えているようでした。

「九歳の節」に向かうときには、自分のふるまいの特徴や性格という抽象的な性質へ目を向けます。ユキさんは叱られてばかりなので「わるがき」であることを認めざるをえず、そのことを書きました。しかし転じて「やさしいたくさんのともだちをつくりたい」と書いています。

第十一回で述べたように、「九歳の節」への上り坂では、おとなの価値観や期待、社会の規範にかなうようになりたいとねがうのですが、現実の自分には「悪い」ことがたくさんあります。そのことを第一答で書いたことは、自分を変えていきたい思いの確かさを示しているのでしょう。「悪い」自分もまた自分であるながら、自己認識のゆらぎのなかで、子

どもは発達の歩みを進めているのです。

高等部三年生では次のように書きま

した。「わたしは、がつこうのきしゆくしゃでたのしくがんばっています」。「みんなとけんかし（せ）ずなかよくあそんでいきます」。けんかばかりしていた自分が、最高学年になって、そうではない自分になってきたことを、まず書きたかったのです。つづけて「先生に、よくおこられたり、ないたりします」。「きしゆくしゃの先生にちゅういされます。先生がしつこいときもある」とも書きました。「なんで」と尋ねると、「私はがんばってるし悪いことしてないのに、先生が信じてくれない」と。「がんばっている」自分をわかってくれる先生がいるからこそ、他者を「信じる」ことの意味を理解し、もっと信じてほしいと語れるようになったのでしよう。他者のまなざしに依っていた自分への意識が、自分のまなざしで自分を理解し、そのまなざしでおとなにも意見するようになっていくのです。

「社会」のなかにある一人の自分

高等部進学とともに学校の寄宿舎へ入舎したことが、ユキさんの自己認識の発

達の一つのきっかけになったようです。当初ユキさんは洗濯物の分別ができなくて、タンスのなかはゴチャゴチャで、濡れたものまで入っていました。裾、襟、袖などをまんべんなく見て、乾いたかどうかを判断することはむずかしいことです。しかし、晴れていれば気持ちよく乾き、雨や曇りならば乾ききらないことを、時間をかけて学んでいきました。そのなかで、ものごとの因果関係や見えな

い本質を理解する力が育っていくのです。感覚、感性を能動的に使って、失敗に学びつつ自分で判断しながら生活していくことによって、自分への手ごたえは確かになっていきました。寄宿舎指導員の先生は、基本的なことはしっかり教えました。生活の主体は子どもであることを尊重されていました。

ユキさんは、年少や肢体障害の仲間と生活し、部屋のリーダーとしての役割を進んで担うようになりました。聞き取りにくい話も粘り強く聴き、日々の介助もさりげなくできるようになったのです。

でも、気のあう同年齢の仲間とは「秘密」の話が夜遅くまでつづくので、「きしゆくしゃの先生にちゅういされます」なのでしよう。ユキさんにとっての寄宿